

平成 27 年度「オリンピック・パラリンピック教育モデル推進校」 事業実施報告書

- I スポーツへの誘い 自己肯定感の醸成

II 障害者や高齢者への理解 共生社会の形成

III スポーツへの関心や競技力向上 スポーツボランティアへの参画

IV オリンピック・パラリンピックに向けた京都の伝統や文化等の発信

V 児童生徒オリンピック、パラリンピックを通じた国際理解教育の推進

実践事業	Ⅲ【スポーツ教室】		
学校名	京都府立乙訓高等学校	全校生徒数	710名
実践学年、部、講座等	スポーツ健康科学科 3年生		
目 標 (ねらい)	オリンピズムの観点(○印) <重複可>	友情 (○) 卓越 () 尊重 (○)	
	スポーツ健康科学科の「スポーツ概論」「スポーツ総合演習」において、高齢者とのスポーツ交流の企画・運営に取り組むことにより、他者を理解・尊重する資質や能力を身につけて、共生社会を実現する人材育成を目指す。		
実践内容	乙訓クラブスポーツ教室における、高齢者対象スポーツ教室「昔遊び」の企画・運営。 「昔遊び」の内容 1. お手玉、メンコ、オセロ、将棋、けん玉、あやとり、こま回し		
実施上の留意点等	※実施上で工夫したことも記入してください。 生徒と高齢者の関わりだけでなく、高齢者と子どもが交流できるイベントを企画運営することに重点を置いた。		
主な成果 (分析結果)	※生徒の意識変化等の効果検証（アンケート結果表やグラフ等の掲載でも可） ※オリンピズム（卓越、友情、尊重）を踏まえた教育活動の成果 本校生徒とシニア世代との交流や地域社会における世代間の交流活動の取り組みを通して、他者を理解・尊重する資質や能力を身に付けることができた。		
主な課題等	スポーツ教室当日の高齢者との交流以外にも、企画段階において、近くの高齢者施設と連携を図れたことが今回の大きな成果に繋がった。 今後も、こういった施設や地域との世代間交流を継続し、日常的にスポーツを通して地域社会と結びつく活動を経験させていきたい。		



平成 27 年度「オリンピック・パラリンピック教育モデル推進校」 事業実施報告書

- I スポーツへの誘い 自己肯定感の醸成

II 障害者や高齢者への理解 共生社会の形成

III スポーツへの関心や競技力向上 スポーツボランティアへの参画

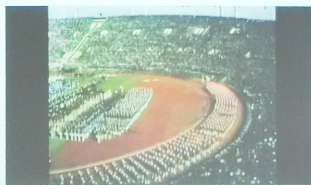
IV オリンピック・パラリンピックに向けた京都の伝統や文化等の発信

V 児童生徒オリンピック、パラリンピックを通じた国際理解教育の推進

実践事業	V【講演会】		
学校名	京都府立乙訓高等学校	全校生徒数	710名
実践学年、部、講座等	スポーツ健康科学科 1、2年生		
目 標 (ねらい)	オリンピズムの観点(○印) <重複可>	友情 (○) 卓越 () 尊重 (○)	
	オリンピック・パラリンピックに関する知識・理解・関心の向上を図りオリンピック精神を学ぶ。 また、オリンピック毎に発展を遂げているスポーツ科学について、時代毎の変遷や最新のスポーツ科学の現場への応用について学ぶ。		
実践内容	記念講演会の実施 講演内容 1. オリンピックの発祥と現在に至る経過。 2. 日本におけるスポーツ発展とオリンピック。 3. スポーツ科学の最前線について（競泳用水着の変遷）		
実施上の留意点等	※実施上で工夫したことも記入してください。 特になし		
主な成果 (分析結果)	※生徒の意識変化等の効果検証（アンケート結果表やグラフ等の掲載でも可） ※オリンピズム（卓越、友情、尊重）を踏まえた教育活動の成果 オリンピックにおける最先端用具の開発（競泳用水着）について、最新の情報を学ぶ事により、スポーツ科学、健康科学等広い範囲の知見を得ることができた。また、日本で開催されるオリンピックに生徒自身がどのように関わっていくのか考える機会となった。		
主な課題等	講演内容（オリンピックを通じた教育と最先端のスポーツ科学）とキャリア教育を結びつけ、学習に対する意欲向上に繋げ、スポーツに関わる進路指導に役立てる。また、スポーツ健康科学科が実施している研究発表への意欲向上に繋げるため、継続した指導を実施したい。		



嘉納とクーベルタンそして幻の1940年
東京五輪



University of Tsukuba

IMAGINE THE FUTURE.

「オリンピックと最先端スポーツ科学」
筑波大学大学院人間総合科学研究科
教授 高木 英樹 先生

実践事業	Ⅱ【車いすフェンシング】			
学校名	京都府立乙訓高等学校		全校生徒数	710名
実践学年、部、講座等	フェンシング部1，2年			
目 標 (ねらい)	オリンピズムの観点(○印) ＜重複可＞	友情（○） 卓越（ ） 尊重（○）		
	フェンシング部活動において、車いすフェンシング日本代表の選手と交流することで、パラリンピック種目への理解を深める。			
実践内容	1 車いすフェンシング選手による、ルール、魅力について講義 パラリンピックに向けた意気込みや目標などの講演 2 体験、選手たちからの指導 3 団体戦、個人戦の試合形式を実施			
実施上の留意点等	事業の始めに、車いすフェンシングのルールや魅力を、選手たちから話してもらうことで、部員に競技の楽しさを理解させ、自然と交流が図れるよう工夫した。			
主な成果 (分析結果)	車いすフェンシングの楽しさを理解し、パラリンピック種目への理解を深めた。 障害のある人が補助を必要とする場面、しない場面等を理解し、自然な補助ができるようになった。			
主な課題等	さらに体験事業などを実施して行きたいが、車いすフェンシングの用具や必要部品は、重量もあり運搬が容易でないため、実施施設との連携などが必要である。			